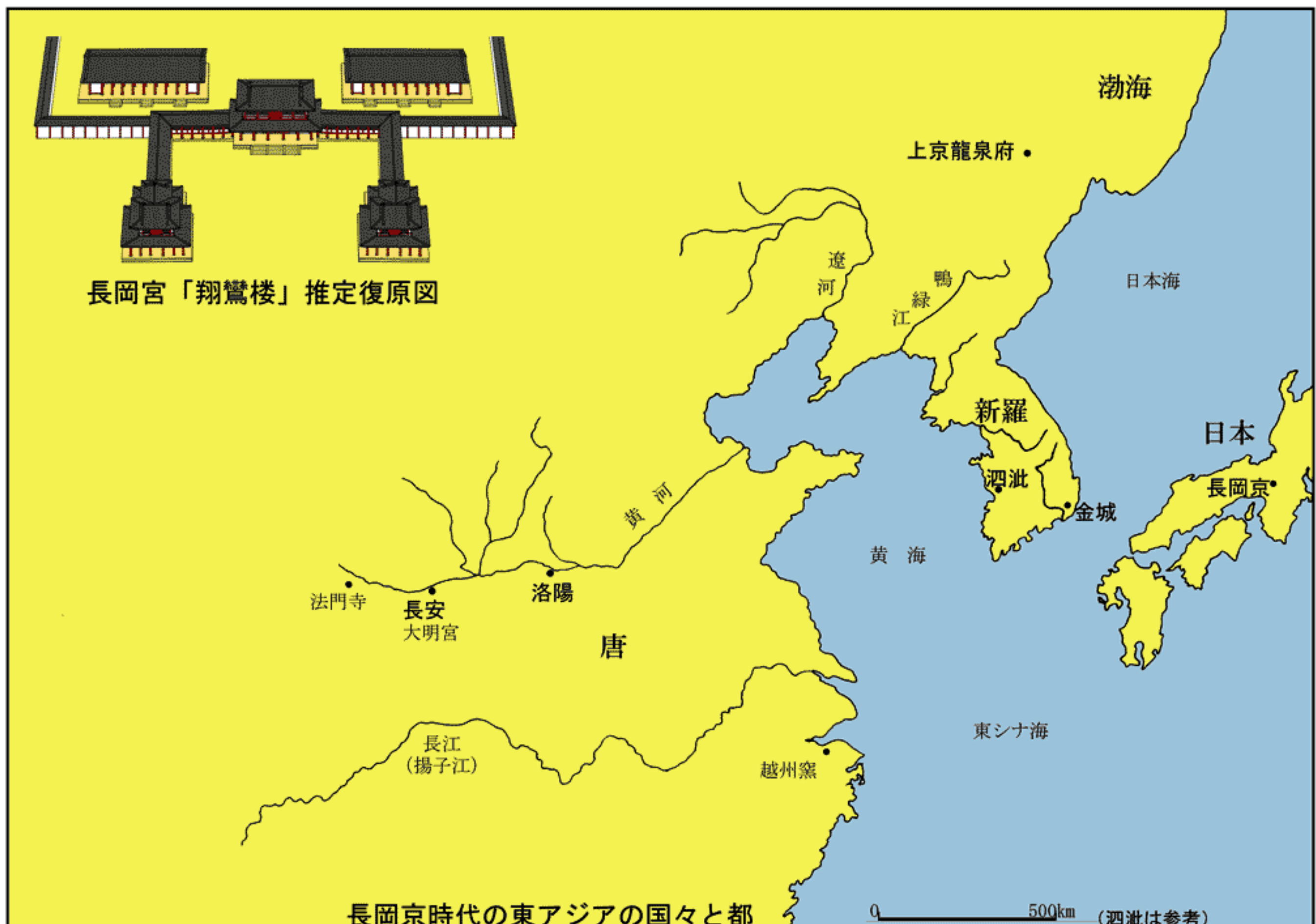


東アジアからみた長岡京

～長岡京のルーツ～

長岡京（784～794年）は、「長岡」と呼ばれた丘の上に宮殿（宮域）の主要部分を配置し、多数の川を運河として京域に取り込み造営されています。この都が置かれた10年間は、さまざまな変化がみられる時代です。宮殿は天皇の住まいであった内裏が大極院から独立し、朝堂院の政務機能は内裏に移されました（内裏聴政）。また朝堂院南門は、左右に楼閣を備えた門闕構造にされるなど奈良時代までの都にはなかった建築意匠が導入されました。しかも、歴代の天皇で初めて都の南郊、交野の地において天神を祭る儀式（郊祀）を行っています。

これらの事実は、桓武天皇が専制的な政治と理想的な都づくりの理念を実現するための政策とみられます。中国の歴代皇帝は、権威の象徴として高さを強調した瓦葺き建物を建造しています。また、唐代の都、長安城（西安市）では皇帝が都を正当化するため毎年冬至に京南東の天壇で天帝への報告儀式を行いました。桓武天皇は、自らを皇帝に擬え、長安城を手本にした都を再現しようとしたのでしょう。宮殿は、長安城の宮城門の建築意匠を模倣し、巨大な基壇を意識して丘に造営しました。一方、中国のみならず韓国との関係も重視した可能性があります。桓武天皇の母方は、百済王氏という渡来系氏族の末裔です。朝鮮半島で百済が滅亡した後、残された百済の人々は渡来して河内に本拠地を構え官人として登用されました。桓武天皇は、百済王氏を外戚と位置づけ、官人の位階を上げ重用しています。この点も正統的な天皇の即位を意識していたからに違いありません。唐や韓国の都の姿は、当時の為政者たる天皇が長岡京をどのような都として建設しようとしたかを知る手懸かりになるはずで



中国：唐長安城（618～904年）



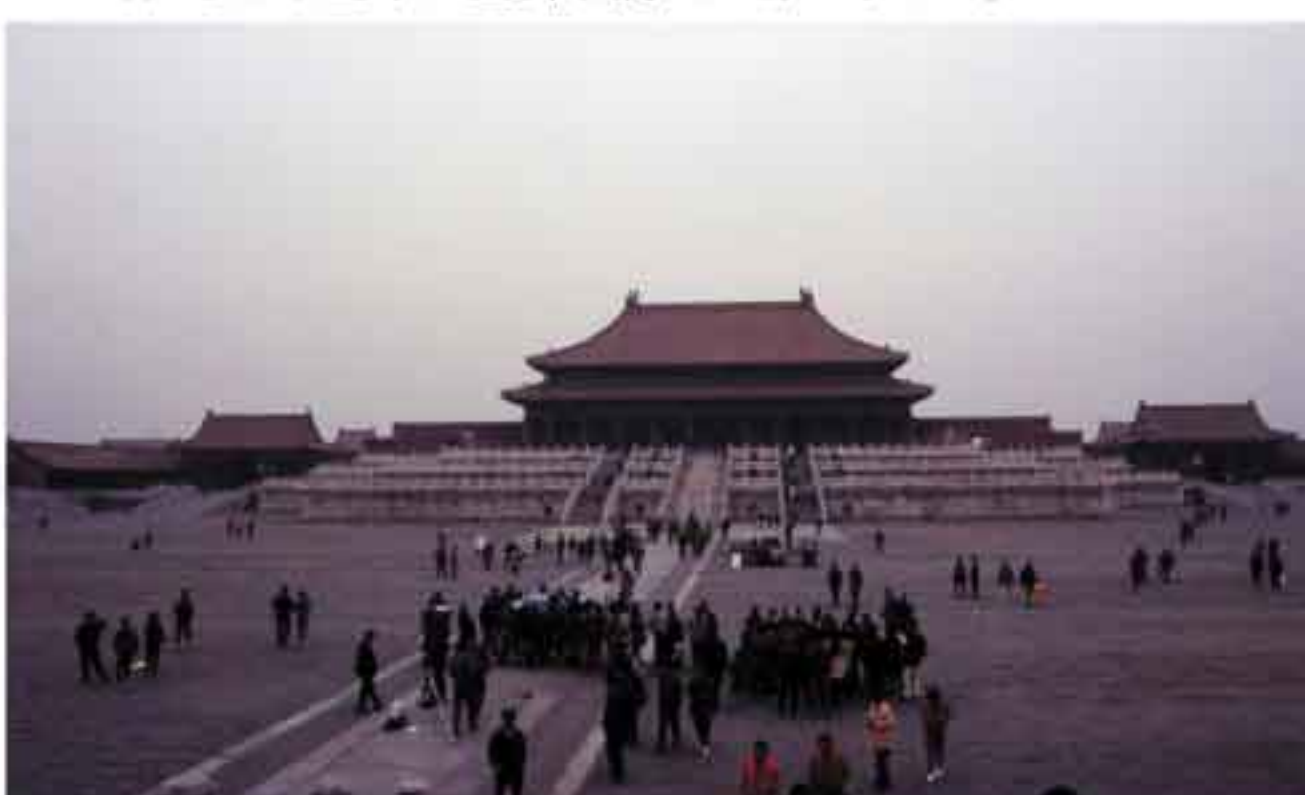
▲ 西安市・唐長安城大明宮麟德殿井戸跡
長安城北東にある大明宮の主要殿舎。太宗が634年に造営し、662年から皇帝の住まいとなり政治の場となった。



▲ 西安市・唐長安城大明宮含元殿跡（西北西から）
含元殿は大明宮の正殿。門闕構造をもつ巨大な基壇建物。



▲ 西安市・唐長安城天壇跡（西から）
明德門（日本の羅城門）の南東にある円丘。王権と都の正当性を示す皇帝の重要な儀式の場となった。



▲ 参考：北京市・紫禁城（南から）
明・清代の都。壮大な宮殿は皇帝の権威を象徴するモニュメント。

韓国：百濟泗泚期の扶蘇山城（538～660年）



▲ 扶余市・扶蘇山城から錦江を望む
扶蘇山城を囲むように自然の濠、錦江が流れる。百濟最後の都が扶余に置かれた。



▲ 扶余市・扶蘇山城軍倉址（北西から）
日常は南麓の王宮跡に住み、戦乱時は山城に入る。



▲ 扶余市・扶蘇山城版築土塁址
標高105mの扶蘇山約2.2kmを囲む土塁。さらに東に羅城がある。



▲ 扶余市・宮南池
王城の南方にある庭園。『三国史記』に武王35（634）年開削とある。都の南方に池を設けるのは四神相応方位の思想（朱雀）か。